

火星



平成18年12月号

七曜抄 (三)

山尾玉藻

蓑虫の満天星もみぢ被て瘦せし

障子貼り替へし夜を父出でゆけり

ブロッコリー畑いよいよ月明り

母が手を重ねてみたる仏手柑

菰を被て松の傾ぎの確かなる

冬菊の横の盥に鯉のゐる

枯蓮の向う流るる鴨の胸

一木の寄生ほよまんまるき寒さかな

校庭のたつぷり濡れし小晦日

寒牡丹男ばかりに覗かるる

太白星

柳生千枝子

後の月雲より洩るる光冷ゆる
列なして雁飛ぶさまを見てをりぬ
貝柱やうやく取れて雁の声
噛みてかみて干し貝柱秋日向
秋日なた柱に残る子の身丈
ざくろ枯れをり美しき葉を落し
朝刊の来し音寒き露にぬれ

杉浦典子

秋草を握り自転車二人乗り
蓑虫の零してをり昼の杜

斜め掛けの大きな鞆台風来
栗山の隣に住んで栗ごはん
初鴨や八〇一号校正す
秋草に日当つてをりクロワッサン
蓑虫のまはりの空気やさしかり

浜口高子

登山電車のスエッチバックや月淡し
厄日くる潮入川の焦げくさき
片耳のかゆくなりたり榎檀の実
露むすぶ鬼の雪隠巡りけり
甘櫨の日が葱畑に及びけり
風船乗せ北陸本線しぐれ中
馬追や紙コップに注ぐ球磨焼酎

火星作品

山尾玉藻選

道一本煙いつぽん曼珠沙華
西宮 米澤 光子
近々と仁王に腰や稲びかり
南瓜に筵敷きある月夜かな
ポストまで髪の濡れある天の川
野辺送りの紐持たさるる葛の花
踏みあとに水湧いてある真葛原
藤井寺 戸田 春月
鈴虫の孵りし兄の忌なりけり
苦うるか食うべし夜の兄の眉
火を放ついくさのありし曼珠沙華
どこから正面でありし彼岸花
無花果に梯子かけあり昼の月
八幡 大山 文子
父酔へば高梁畑果てしなき
木津川の水の乏しき晩稻刈

まほろばの空晴れすぎる種茄子
青菘に停つてゐたる霊柩車
耳朶のぬくみありけり鶏頭花
へうたんに日当り洗濯機まはる
待宵や尻尾きれいな海老フライ
くもの囿の中を九月の雲うごく
ネクタイの夫に晴れたり鯔の海
生飯台の溜りし水の澄みにけり
月明や軒に吊る籠少し揺る
高^{たか}円^{まど}の草のをどりし落し水
野分兆すやつつやの鹿の糞
秋澄むや蓮葉より落つ水の音
長き夜をはみ出してゐる胡座かな
鶏頭や雨溜りある五右衛門風呂
秋の滝日差しの中に落ちにけり
木洩れ日に水のぶつかる白桔梗
みんなみに月の欠けゆく茸山

大和郡山
城
孝子

宝塚
山本
耀子

穴栗
田中
英子

選のあとに

山尾 玉藻

者であろう。「家庭あり」と言いきれるのは歲月故の事である。

秋草の中州より水二色に 松山 直美

道一本煙いっぽん曼珠沙華 米澤 光子
懐かしい風景を簡潔に切り取った秀作。必要不可欠のもの以外は全て省略。助詞さえ省いた名詞のみの作品である。へ一本——本曼珠沙華の用語だけを詮索すれば、即き過ぎを言い立てる者もあるかも知れない。しかし、この直線的な断定表現には有無を言わさぬ完結さがある。

月代をかへりてきたる腰に鎌 山田美恵子

昔の百姓の仕事の在り様を例えて「朝は朝尾、夜は夜星」と言っていた。やはり掲句も現在の景とするよりも、作者がむかし遭遇した回想と見る方が味わい深い。日の落ちるまでは夫婦して稲を刈っていたが、農婦の方は夕餉の仕度に一足先に帰ったのである。夫の方は手許が見えなくなるまで働いて帰ってきたのである。切り取られた美しい景の裏には、厳しい百姓の生業がある。

朝顔の花愛でし頃家庭あり 加藤 君子

君子さんの境涯の一部を垣間見たような気がする。元々、俳人は本人が言わない限り、問うてまで詮索する事はタブーであり、境涯など聞かない事が約束事となっている。「朝顔の花」の清潔、清楚さから想像すると、戦前のお若い頃の作

者であろう。「家庭あり」と言いきれるのは歲月故の事である。明確な切れが無い句であるが、むしろそれが「水二色に」と言う微妙さを醸し出している。作者は橋の上か、堤などの少し高みから望んでいるのであろう。「中州」によって左右に分かれる水が明らかに違う色である事に気付いたのである。恐らく分かれた瀬の深淺によるものであろう。一句となったものを見れば、誰にでも出来そうな句に思えるが、確かな写生句を作る事は、ものを見て見て見抜くという大変な作業である事を心すべきである。

退院の眼鏡干しある秋日向 高橋 芳子

上質な俳諧とは滑稽の裏に哀れ、悲しみがある事を旨とする。「眼鏡干しある」には、まるで変人の行為のような滑稽があるが、「退院の」とあれば納得する。病院と言う所はむしろ清潔な所であるが、病院臭とでも言うべきあの匂いが好きな者はいないであろう。作者は入院と言う非日常から日常へのけじめをつけたかったのである。眼鏡にまでも。

木の陰にそろりと秋の来てゐたる 江濱百合子

秋の気配を覚えるのは、気温や風など肌で感じるものその他、この句のように視覚での感じ方もある。「木の陰に」は大気の澄みであり、日差しの色である。「そろり」とは日々の少しずつの移ろいである。「そろりと秋の来てゐたる」もあか抜けた俳味のある表現で良い。

恒星圈

同人 I

岡 和絵

飯塚 糸子

蝶形も櫛形もあり新生姜
亀石をうしろに秋の鱗鱗草
三方に道別れをり柿の秋
摩周湖の日差し覗いて去ぬ燕
ペダル踏む音の近づく彼岸花

大山 文子

流木を集めて焚けり二日月
竹伐つて稲荷の御旗現れり
山の名に親子孫あり蕎麦の花
吹き返す風生ぬるき吾亦紅
大寺の礎ぬくし雁渡し

露草の濃くなり水音高まり来
パン焦げる匂ひ流るる秋の雨
秋の蚊の吹かれ落ちきし肌かな
秋の雨振子時計のふいに鳴り
彼岸花棚田に炎とびとびに

加古みちよ

峠路に落ちそこねたる秋の雷
水の秋父に抱かれて子の眠る
橋渡り穂草の揺るる道となる
蔓引いて戻れぬ日々のありにけり
栗茹でて立つも座るも一人なり

加藤 君子

この齡の初もの食ひのゴーヤなる
秋麗のいささかちぢむ我が身丈
この秋の美味を尋ねむあべの道
あざやかに横歩きして小鳥かな
日の本の寿ぎの秋忘れめや

獅子座

山尾玉藻推薦

河崎尚子

玉串の露飛び散りぬ宮相撲
豊年の真つ赤な化粧回しかな
宮相撲大き襦袢の大泣きす
軍配団扇返し秋日を返しけり

渡邊美保

現地集合現地解散花野にて
手洗ひの父のしはぶき葉鶏頭
見得をきる人形の首十三夜
秋の昼耳覆ひたるゴッホの絵

助口弘子

ま青なる木の実拾うて神の山
悪面の潰れてゐたり花芙蓉
彼岸花ふり返ることためらひぬ
電動の草刈る音と赤とんぼ

松井倫子

山里のリハビリの道草は実にながりのランプシェードに裂けをりぬ
鉢の蓮銘孫文や小鳥来る
蓮の葉の音に気付きぬ秋時雨

今里満子

秋の夜の草に鳴くもの跳べるもの
秋草の色に触れゆく島日和
水口に束ねありけり草の花
ゴンドラの一気に浮きて秋天へ

山田美恵子

磐座のもみぢし初めし泣き相撲
葉鶏頭隣家に止まる救急車
虫の音に近づいてゆく舐先かな
砂の上をうごく波見え夜の虫

奥田順子

白砂の千鳥の足や野分あと
木の実落つ水琴窟を覗くたび
萩こぼれ通せんぼうの石ひとつ
横顔に月のあかりの男山